

春季教育実習

1. 目的と概要

1.1 目的

春季教育実習の目的は、実際の教室活動を体験するとともに、日本語教育の現場を客観的に観察することである。実習生は、実際に、教案を作成するなど授業の準備をし、実施する。そして、自らの授業をフィードバックするだけでなく、他の実習生の授業、或いは経験を積んだTAの授業を見学することにより、教室で生じる問題点を発見し、様々な角度から教授法について考える。

1.2 春季集中日本語講座の概要

- 名称 : 名古屋大学留学センター2005年度春季集中日本語講座
開講期間 : 2005年2月14日(月)～2005年3月8日(火)
実習クラス : 初級Ⅱb
対象 : 名古屋大学に在籍する外国人留学生
(全学向け日本語講座6ヶ月コースを修了した学生、
短期交換留学受け入れプログラムの学生)
学習者の出身国 : ビルマ、中国、韓国、ポーランド、マレーシア、モンゴル、ベトナム
登録学習者数 : 11名
使用教科書 : A Course in Modern Japanese [Revised Edition] Vol.2 (2002)
名古屋大学日本語教育研究グループ編 名古屋大学出版会

2. 実習の実施

実習生はTAと組み(各TAが実習生を2名ずつ担当)、1日2時限(90分×2)の授業のうち、実習生は半時限(45分)を、残り1時限半(90分+45分)をTAが担当する。期間中、各実習生は2回の実習を行うが、1回目は2時限に、2回目は1時限に実施する。

実習生は、TA、或いは、他の実習生の授業を見学できる。(見学者は各時限に3名以内。)

実習生が担当した授業は、以下の通りである。

実習生	日時	担当課	学習項目
稲田 朋晃	2月15日	L12	Potential sentences ～ことができます、～(ら)れる
国沢 里美	2月16日	L12	～ておく、～てみる
大島 晋	2月17日	L13	Group4 particle : と
太田真由美	2月18日	L13	V(base)やすい、V(base)にくい
長谷川紀子	2月21日	L14	～つもり

林 真紀	2月22日	L14	もう、まだ
河口 苗子	2月23日	L15	Informal speech
越賀智映子	2月24日	L16	Suffix:~そうだ (伝聞)
稲田 朋晃	2月25日	L15	~てくる
国沢 里美	2月28日	L17	Giving and Receiving Verbs Vてくれる、Vてもらう
大島 晋	3月1日	L17	Non-polite volitional form ~ない?、~(よ)う
太田真由美	3月2日	L17	Group4 particle : ~のに
長谷川紀子	3月3日	L18	~ようだ、~みたいだ
林 真紀	3月4日	L19	Causative sentences
河口 苗子	3月5日	L19	Causative passive sentences
越賀智映子	3月6日	L20	Vるところ、Vているところ、Vたところ

3. 授業の反省

実習終了後、実習生は「日本語教授法及び実習」の授業で、4月から5月にかけて、実習の様子を撮影したビデオを見ながら、各自が担当した授業についての概要、反省、疑問点などを報告し、全体で議論した。

以下に、授業で検討された実習生の授業改善のための課題を記す。

3.1 授業の準備

〈学習項目に入る前に〉

- ・未習の語彙、文型の確認をしておく。
- ・授業では、未習の語彙、文型を用いるべきではないのか。全然構わない、少しなら良い、用いるべきではない、など。
- ・学習者の犯しやすい誤用についての知識を持つ。

〈学習項目の取り扱い〉

- ・学習項目の文型を使う典型的な場面は何か。
- ・準備の時間が十分とれない時、場面を理解させる有効な方法を使えるようにしておきたい。
- ・文型の難易度を重視していなかった。(モデル会話の難易度が高く、タスクに生かせなかった。場面にこだわり、複雑な文型を使った。)
- ・導入での文型と場面、練習方法の選択や割合をどうすべきか。
- ・項目を整理して授業にのぞむ。
- ・学習項目の文型と一緒によく使う言葉を(プリントなどで)用意しておく。
- ・学習項目と類似表現との違いについて例を準備しておく。

〈授業の前に〉

- ・机の配置をどうするか考える。

3.2 授業の実施

〈授業の流れ／全体〉

- ・時間がオーバーしてしまった。
- ・教案をあまり見なかったこと、終了時間を勘違いしていたことで、時間を20分以上もオーバーしてしまった。
- ・前回の復習をする。
- ・タスクで使うであろう言葉は、ドリル練習の段階で提示すべきだった。
- ・練習と同じことを活動（タスク）でも繰り返している。より創造的な活動ができたのではないか。
- ・準備したものを全てこなそうとして、学習者の理解の度合いや雰囲気に合わせて柔軟に対応することができない。
- ・学習者の様子をみながら授業をすすめる。
- ・学習者の精神的な負担が少ない、いい雰囲気の授業をしたいと考えている。その理由は何なのか。また、雰囲気作りには何の関係しているのか。

〈教師の態度〉

- ・ジェスチャーはもっと大きさにした方がよい。
- ・声が小さい。
- ・声のトーン、イントネーション。
- ・（全体の）テンポが良くない。
- ・活動のテンポ。
- ・立ち位置が悪い場面があった。
- ・考えながら黒板の方を見ている姿は、学習者を不安にさせる。
- ・準備不足で、板書を書いている時間が長くなった。
- ・板書時の体の向き。
- ・板書が適当。
- ・学習項目の使用が過度になり、発話が不自然なものとなっている。
- ・発話コントロールが甘かった。
- ・指示の出し方。強引に進めてしまった。

〈学習項目の教え方〉

- ・導入時にきちんと意味が示せなかった。
- ・学習項目の文型を適切な使用場面で提示できなかった。
- ・導入の例文が、学習項目の文型の意味を伝えるのに最適ではなかった。

- ・ターゲット文型と類義文型の意味の違いが明確に説明できなかった。類義の文型は、確実に説明できるようにしておかなければならないと思った。
- ・絵を用いた練習において、(漸進的な変化の場合、) 2枚の絵だけを提示するのは、単なる状態の変化との混同を引き起こす可能性がある。黒板のグラフを使って「だんだん」のイメージを念押ししておくべきだった。
- ・似たような意味を持つ学習項目との違いを理解させたかったのであれば、そのための練習も必要だったろうか。
- ・似たような意味を持つ学習項目との違いを強調するつもりが冗長になり、説明の時間が長くなった。
- ・説明の時間が長くなり、学習者が発話する時間が短くなってしまった。
- ・文法項目が単純だったこともあり、文法的な説明はせずに例文だけにした。今回に限らず、文法的な説明は必要か？
- ・学習項目の文型の意味を学習者が理解しているかどうか、確認していない。どのように確認すればよいのだろう。→ 学習者に出させる。
- ・既習項目を学習者が全く覚えていなかった。どのように教えたら、学習者に「入る」のか。

〈練習の方法〉

- ・活用練習内の QA において、T と S の必要以上のやりとりが続き、余計な時間がかかってしまった。雰囲気は良くなると思うが、やはり、いけないことなのだろうか。
- ・テンポが重要な発話のための練習で、不必要なフィードバック、不適切なキューにより、学習者に十分な口頭練習をさせることができなかった。
- ・フィードバックや練習方法が単調だった。(T から S への練習が多かった。チェーンドリルなど S 同士の練習をも入れればよかった。)
- ・フラッシュカードだけではなく、口頭キューも入れればよかった。
- ・コーラスさせたかった場面でも指示が悪く、できなかった。
- ・単調なリピートの練習は、できる学習者がやる気を失わないか。
- ・ドリル練習時、滑らかに発話できない学習者が気になり、集中的に当ててしまう。学習者の負担にならないだろうか。

〈教師の応用・即応能力〉

- ・自由発話をさせた際、学習者が伝えたい意味を正確に理解せず、自分が勝手に想像した回答を学習者に押し付けていた。学習者が伝えたい意味を十分に汲み取るよう落ち着いて聞き、分からなければ学習者間のインターアクションの力を活用したい。
- ・学習者の発話をきちんと理解せずに、無理やり出したい形を引き出そうとしていた。学習者の発話を活かせなかった。

- ・(自由発話の練習で、) コントロールしすぎ。自由会話ではなくなっている。
- ・予測していないことに対し、落ち着いて対処ができない。
- ・教壇に立つと、誤用に対する判断が曖昧になる。適度な授業の流れや学習者の理解に対する適切な対応ができない。
- ・学習者とのやりとりが少なく、一問一答という感じであっさりと終わってしまった。変なタイミングで質問がないか聞いたり、補足説明をしたり、思いつきで動いてしまうことがあった。

〈フィードバックの仕方〉

- ・学習者の誤用を、学習者がきちんと理解できるように、段階を踏んで説明する。
- ・教師が一方的に、即、フィードバックするのではなく、誤りを犯した学習者に思い出させたり、考えさせたり、学習者の記憶に残る方法を用いる。
- ・誤りを犯した学習者だけでなく、他の学習者も確認、理解できるように、他の学習者に聞いたり、確認のリピートをさせる。
- ・個人的に練習させ、その後のフィードバックを十分にしていない。学習者の困惑を汲み取ることができず、疑問を解消していない。
- ・学習者の発話内容に関するフィードバックよりも先に、理解の確認を行っていた。
- ・早めに解決しようとして、教師の一方的な発話となっている。
- ・いいほめ方、いい訂正のしかたは？
- ・誤用訂正のタイミングは？
- ・説明、訂正の仕方、フィードバックの仕方が不適切。

〈活動(タスク)のあり方〉

- ・タスクを完遂することを目的に授業を組み立てた。タスクをしているときと、する前ではどちらの方が学習者がより多くを学んだだろうか。タスク前の活動はどれくらい必要か。
- ・自分が受けて楽しいと思えるような活動、授業をすることを心がけた。教師がある活動をするときに、その活動をするということを選ぶ基準とは何か。
- ・タスクはどのようなものにすべきであったか。選択の基準や理由を明確にしなければならない。
- ・活動の説明が不十分だった。
- ・活動をどう終わったらいいのか。

〈教具・教材〉

- ・事前の授業で学習者が単調なドリルを嫌っていると判断し、どうすれば面白くなるかを考え、フラッシュカードの代わりに(パソコンの)フラッシュを使って練習したが、

(教具を代えるだけでなく)もう少し、考えた内容にすべきだった。

- ・絵カードの選択のしかた。絵の中に複数の人物がいて、誰の視点で発話するかが曖昧になった。
- ・プリントの絵の情報量が多かった。

4. まとめ

今回の春季実習では、実習生は、初級の割り当てられた学習項目を、授業の準備をして、実施した。また、経験を積んだ TA、或いは、他の実習生の授業を見る機会を得、初級クラスの教授法について、多くのことを学んだと思う。

実習生が、授業を振り返って、授業改善のための課題としたことを大きくまとめると、まず、授業の準備として、未習の語彙・文型を確認し、学習者の犯しやすい誤用についての知識を持つことが挙げられる。ただし、未習の語彙・文型を授業で用いるか否かはまた別の問題となる。学習項目は、その文型を使う典型的な場面を考え、学習者に意味を導入してやることになるが、予め、その文型と一緒によく使う言葉、類似表現との違いをどう理解させるかをも準備する必要がある。導入→ドリル練習→応用練習→タスクという段階に応じて、用いる語彙、難易度を計画し、より創造的な内容へ変化させなければならない。ドリル練習においては、テンポ良く、学習者に十分な発話をさせることが課題となるが、一方で、滑らかに発話できない学習者にはたくさん練習させたいが、できる学習者は単調な練習でモチベーションを失うのではないかという問題もある。応用練習で学習者に自由発話をさせる際には、教師の応用、即応能力が問われる。実習生の多くが、学習者の発話を正確に理解せず、勝手な解釈、都合を押し付けることとなってしまうたり、適切な対応ができなかったことを反省している。これらの練習では、フィードバックの仕方も大きな課題であり、学習者が理解できるように、段階を踏んで説明するのは勿論、一方的に訂正するのではなく、訂正の仕方、タイミングを様々に工夫する必要がある。タスクをどのように扱うかも課題である。タスクを行うことによって、学習者が得るものは大きいと考えるが、タスクをどのようなものにするか、選択の基準や理由は明確でなければならない。教具・教材についても、発見があった。絵カードの情報量などは、注意すべき点である。授業の流れとしては、段階を追って、計画的に、授業を進めていくのであるが、学習者の様子を見ながら授業を進めていくこと、準備したものを全てこなそうとして無理をして、学習者に負担を与えないことである。教師の態度には、まず、ジェスチャーや声が問題点として挙げられ、個別の活動や全体のテンポ、発話コントロール、指示の出し方も改善すべき課題である。また、板書の計画、書き方も課題となる。

このように、準備し、実施した授業を、記録にとって、後にフィードバックしたこと、また、それについてクラス全体で検討したことで、実習生は、教授法について様々なことを学び、また、考えることができた。

最後に、実習期間中、担当となった実習生を、つきっきりで、教案の作成から授業後の

アドバイスまで、面倒を見て下さった TA の方々、そして、ご指導いただいた鷺見先生に、心より感謝申し上げます。

<太田>